A R P A K ・ N E W S L E T T E R

アルパック ニュースレター

VOL153　2009 年 1 月 1 日　ISSN 0918-1954

迎　春

平成 25 年の式年遷宮に向けて、今年は宇治橋渡始式の年です：伊勢神宮
（伊勢市の観光まちづくりをお手伝いしています）

目次／contents

新年のあいさつ ･････････････ 2
人・まち・地域 ･････････････ 4
・特集「変わりゆくまちかど」／中塚一・絹原一寛・西村創
・まちづくりの裁判員制度！？「座・でぃすかす」
～草津市の新たな試み～／廣部出・石井努
・韓国のデザイン産業の振興に関する状況／堀口浩司
きんきょう ･････････････････ 12
・次世代たちへ／三輪泰司
・篠山チルドレンズミュージアムの館長してます。／森岡武
・最近食べた「すし」　勝手に分類学！／原田弘之
・信楽陶芸トリエンナーレの開催を目指して／大久保悠子
メディア・ウォッチ ･････････････････････ 17
・「正しく知る地球温暖化～誤った地球温暖化論に惑わされないために」／森脇宏
まちかど ･････････････････････ 18
・路地歩きって楽しい／中村孝子

新年あけまして
おめでとうございます

Speak out（勇気を持って声を出す）の１年に

代表取締役社長　杉原　五郎

2008年。ＮＨＫ大河ドラマ「篤姫」が静かなブームとなりました。江戸末期、徳川幕府の大奥で、歯切れ良く凜（りん）とした生き方を貫いた日本女性がいたことに驚きと感動を覚えました。宮崎あおいさんが演じる篤姫のセリフに、何度かまぶたを熱くし、生きる勇気をもらいました。

さて、2009年。今年はいったいどのような１年になるのでしょうか。2007年12月、アルパックは、Like a Tugboat（地域と共に）をキーワードに、40周年記念のタグボートフォーラムを企画しました。2008年８月に中期経営戦略を策定し、これに基づいて経営の発展と経営改革に取り組みました。本年は、Speak out（勇気を持って声をだす）の精神で、経営環境の改善とアルパック経営の前進に邁進したいと思います。

若さで地域の再生を考える

取締役会長　金井　萬造

新しい年に年令が１才若くなる正月を迎えています。平成20年４月より立命館大学の経済学部の教授をさせて頂いています。専門は観光学で若い学生と接していると何かしら不思議なエネルギーが作用して元気･パワーを貰い、新年とともに1才若がえってくる実感を経験しています。また若者のセンスの良さにも驚きます。観光の学習の効果を上げるために授業に合わせて現地を見学しますが、驚くことに若者は観光地の課題を直感的に把握してしまい、しかもそれが大きく間違っていないことを何回か経験しました。

本年はこの若さの勢いを持続して経済環境の厳しい地域を関係者と協力しながら地域に元気をもたらし、観光的志向で地域再生に貢献していきたいと思っています。

お正月

取締役相談役　三輪　泰司

座敷の正面に両親が座り、右には男の子、左に女の子が二人ずつかしこまっていました。塗のお膳は男が朱で、なぜか低い。女は黒で足がある。紋も違う。男は家紋付きで、女は女紋。白味噌仕立てのお雑煮は、先ず大きな頭芋との格闘。これを片づけないとお餅がいただけません。次にくわいや棒ダラなど。お正月はこんな具合で、子どもたちは大人の食文化と作法を学習していました。

でも、私のこの体験は、いま調べてみますと僅か３回か４回。昭和13年･小学校１年生から昭和17年･３年生までです。

我が国は戦争をしていました。昭和16年の４月には米が配給通帳制になり、12月開戦。お雑煮どころでなくなりました。

夜空に咲かそう除夜の鐘

取締役副社長　馬場　正哲

平成４年の全社研修会で、西山夘三先生が「環境･生活の基盤となる生活空間は長期を睨んだ科学的な計画なくしては改善されない。それを日々変えて行く様々な開発は相互に様々な目論見による対立・矛盾を持つ。これを可能なかぎり調和させ、整合性をもつ合意の計画に総合しなければならない。この合意形成の手段として『構想計画』が登場する。」と示唆されました。それから今日、一歩ずつその実行に近づく過程にあるように思いますが、まだ、住民意向の行動実現の段階で、今後、行政も変わり、様々な施策と試行が総合されて地域統治の形を展望したいと思っています。

この年末年始、天王寺区未来わがまち会議で、天王寺らしさと区民の和を求めて『夜空に咲かそう除夜の鐘』と銘打った「除夜の鐘撞きたい」を区民委員が企画、百八の煩悩を除き、清らかな心になって新年を迎えます。とんだ「としおとこ」の年のはじまりです。

本年もどうぞよろしくお願いいたします

妖怪の初詣

京都事務所長　松本　明

正月はほぼ帰省します。郷里の境港は山陰の漁港で、カニ、さばをはじめ海の幸が豊富。正月は漁も休みですが、おせちとカニは定番で、海の幸を食べに帰るといったところです。

除夜の鐘を聞いてから「水木しげるロード」を歩いて妖怪神社に向かうと、参拝客に混じって塗り壁やねずみ男も静かに初詣。今年もまちの賑わいを祈っているかのようです。地元の人々が「妖怪なんて」と気味悪がっていたのも今は昔。いまや郷土の誇りとまではいかないまでも、人々はなぜかゆったりした心持ちで妖怪たちに微笑んでいます。

ニセ錬金術の浮かれ騒ぎも失速し、これからは、額の汗が報われ、ゆったりとした豊かさと誇りが大切にされる世の中へと舵を切るべくがんばりたいと思います。あ、もっとも妖怪は働くのが嫌いだけれども。

初詣のお神籤

大阪事務所長　森脇　宏

例年、元旦の朝は近所の神社に初詣に行っています。以前は、子供達も付いてきましたが、最近は女房と二人で行くことが多くなりました。神社では、年に１回だけのお神籤を引いていて、以前は女房の方がいい運勢が多く、家庭内は婦唱夫随にしていましたが、ここ２年ほどは私の方がいいので、立場が逆転しています。

大阪事務所については、厳しい受注環境の下で、所員の頑張りに支えられて健闘していますが、今後の発展に向けて、ステイタスの向上、事業領域の再編強化、持続的発展可能な体質改善に取り組んでいきたいと思っています。ただし、これらの見通しは、お神籤で占う訳にはいかないようです。

文化の伝承と融合

名古屋事務所長　尾関　利勝

季節行事や新年準備に追われる年末は主婦には大変な時。近頃、我が家ではお節料理をどうするか議論になります。子供達が自立、簡略化と言いつつも、結局、腕を振るうのは間に合わない手伝いが居ても主婦なのです。

年の瀬、名古屋駅前にある場外市場の柳橋市場が市民に開放され、普段は料亭や飲食店、小売店の仕入で活気を見せる市場は、お正月の食材買出し客が入り交じって大混雑です。

大晦日、大掃除の一段落後は鰊そばで年越し、明けて近所の氏神様や恵方神社に詣で、新年の幸福を祈願、名古屋の地酒のお屠蘇とお節料理を頂きます。我が家のお雑煮は白味噌仕立とすましを交互に味わう京風と名古屋風の地域文化が複合した暮らしの始まり。あわせて皆さまの幸多き年を祈念いたします。

激動の年の瀬に思うこと

企画政策推進室長・東京事務所長　堀口　浩司

台湾、中国本土では、古い街並みの修復や復元によって地域の誇りを取り戻し、観光地としても再出発する「老街ブーム」が盛んに行われ、国内外の観光客を集めていました。また、韓国でもソウルへの一極集中化の中で、地方振興のためにグリーンツーリズムや集落の復元といったことが行われています。

昨年末はリーマン・ショック以降、予想もしない急激な経済環境の悪化、世界同時不況の様相を示してきました。米国という消費大国の不況により、輸出中心の経済構造から内需拡大の景気対策へと大きく舵取りが始まった感があります。内需拡大策をとるなら、良質な都市ストックの拡充に期待したいところです。

今年も一層のチャレンジの年に！

九州事務所長・(株)よかネット代表取締役 山田 龍雄

正月を迎えると、高浜虚子作「去年今年貫く棒の如きもの」という、いつも口ずさむ俳句があります。高浜虚子は、正月を迎えても天地自然の理は今年も貫く棒のように変わらないといった壮大なことをイメージしているそうです。この句をはじめて知ったときから、私は『正月のつかの間の団らんの日々が過ぎれば、また、今年も貫く棒のように、昨年と変わらない日々を迎えるもの』というように勝手に解釈しておりまして、私にとっては非常に愛着のある俳句の一つとなっています。しかし、私たちコンサル業界にとって、今年も景気の寒い風がもっと吹きすさぶことが予想され、確実に仕事は「貫く棒のようにはならない」と感じます。今年も新たな仕事にチャレンジし、寒い風に立ち向かっていかなければと思う今日この頃です。

ひと・まち・地域

特集「変わりゆくまちかど」～新しいまち・再生したまちが頑張っています！

ニュースレター編集部では、前号に引き続き「変わりゆくまちかど」をテーマに、新年号に相応しく「新しく誕生したまち」や「元気に再生したまち」に着眼して、大阪を中心に取材を行い、ここ１～２年で変わっていっているまちかどを中心にお伝えします。

前号は、「消えゆくまちのシンボル」をテーマとしたので、昭和を回顧するノスタルジーなイメージが強くなったのですが、新年の今号は世界レベルの経済不況でも「元気な関西」をお伝えできればと考えております。

天満編～大阪事務所／中塚　一

天暦年間（950年頃）に天満宮が建てられ、その後千年の歴史を持ち、今に続いている「天満・天神橋筋」。今回紹介するのは、日本一長い天神橋商店街の５丁目付近にある天満市場周辺での「市場の夜」の変化です。天神市場の歴史は古く、大阪城築城当時から大川沿いに集結した食材の集積場でした。その中でも青果物を扱う天満青物市場と呼ばれ、昭和６年に中央市場が開場され吸収されるまでは、正に大阪の台所でした。

現在、天満市場は、平成17年に市街地再開発事業により超高層の「ぷららてんま」に様変わりしていますが、今回紹介するのはその足元に広がっている市場の夜の移り変わりです。昼間は生鮮食品などを販売している店が開いていますが、夕方に店が閉まる頃に入れ替わるように昼間閉まっていたシャッターが開きはじめ、屋台風の様々な国籍の飲食街へと変身していきます。

まずは上海の路地裏にあるような点心の店からスタートし、メキシコ屋台の定番である鶏の丸焼（ボジョロスティサド）が名物の店、焼肉と韓国料理の店、そして週変わりで各国のワインを飲ませてくれるワインバーへと、新しいスタイルの「屋台はしご」が出来る路地空間へと変わってきています。さらに周辺にもこのようなスタイルのお店が集積し、今では都市型観光地「テンマ・インターナショナル・ヤタイ・ビレッジ」とも呼ぶべき界隈へと生まれ変わりつつあります。

呑み助には堪らなく魅力的な路地ですが、くれぐれも度を越えないようにこころしつつ、今夜も足が向ってしまいます。

阿倍野編～大阪事務所／中塚　一

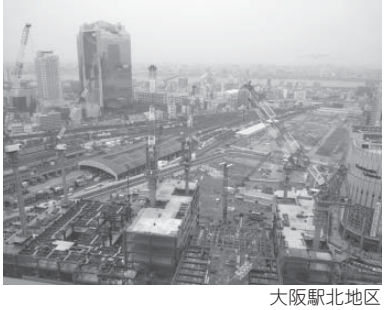
2000年９月のニュースレター103号に「南下するか阿倍野の人の流れ」というテーマで、あべのHoop（フープ）完成時のまちの変化について、「東京系の人気ショップが集まった段階の次、阿倍野でなければ出会えないスポットとなっていくための周辺地域への波及効果が期待される」と報告させていただきました。

その後のまちの変化は激しく、風俗店やラブホテルの横にカフェやレストラン、古着屋、小劇場などの魅力的な店舗も多数立地し、駐車場や市立体育館跡がマンションに変化するなど、あべの筋西側の超高層による市街地再開発が進むエリアと比べ、道路が十分整備されないまま「ごった煮」の様相を呈してきています。しかしこれは言い換えるとジェーン・ジェイコブスが多様性がある魅力的な都市をつくる上で提唱した４つの原則（①地区は二つ以上の機能をはたすこと。②道は狭く、折れ曲がっていて、一つ一つのブロッ

異国情緒あふれる店が路地に並ぶ

Hoopと１階レベルの歩行者動線でむすばれたand（アンド）

敷地整序で広がった道路


大阪駅北地区

ブリーゼ・タワーからの西梅田

クが短いこと。③建てられた年代が違う建物が混じり合っていること。④人口密度が十分に高い状態にすること。）に見事にマッチしたまちへと変化してきていると言えるのではないでしょうか。

さらに2008年9月、地区内の大阪府官舎跡地に「フダンを新しくする」をコンセプトとした「and（アンド）」（abeno natural daysの略）がオープンしました。施設内の店舗はどうしても「大阪初」や「西日本初」などが並びますが、Hoopやandの周辺地域に開かれた施設内の通路のお陰で、地域の回遊性はさらに高まっていくことが期待されます。

さて、個人的にあべの筋西側の再開発区域内の路地奥にあった昭和21年創業のロールキャベツが有名な洋食屋がどうなるのか心配だったのですが、無事にあべの筋沿いに仮設店舗を構え、TVや雑誌のメディアにも多数取り上げられた影響もあり、連日、「行列が出来るお店」状態にあります。

京橋編～大阪事務所／西村　創

「きょ～ばしは、え～とこだっせ～♪」京橋といえば、在阪の方はこのCMのイメージが強く、JR、京阪本線、地下鉄と大阪の東の交通結節点ではあるものの、若者、おしゃれといったキーワードとは縁遠い、どちらかというとおじさんサラリーマンのまちというイメージが強いのではないかと思います。

しかし最近では、その様相は幾分変わってきているのです。平成14年の京阪駅ビル（京阪モール）の大規模リニューアルから、駅西の京阪高架下での店舗拡張リニューアル（Kぶらっと）などにより、駅の西側周辺に、多国籍料理やワインバー、ビールバー、おしゃれな内装の店舗などが増え、若い女性などこれまでとは違う客層が訪れだしたことにより、イメージの中心が東から西へと移ってきているのです。

その影響は、冒頭のイメージを色濃く残す東側にも、ひがし京橋商店街が「ジャズの街」を打出し、ちらほらと若者をターゲットにした飲食店が見られるようになってきています。

そこに、京阪戦略第三弾で、平成20年11月末に「KiKi京橋」がオープンしました。京阪片町口の北側に敷地整序型土地区画整理事業により集約化された約0.25haの宅地に、吉本興業(株)による京橋花月（5階約500席）を核テナントとした約6,400㎡の「情報と文化の発信」拠点が出現しました。飲食のみならず、新たなレジャーも可能となり、昼夜問わず新たな人が訪れるまちへと変貌していくのではないでしょうか。

古くからのイメージを残す東側と京橋の新しいイメージを発信している西側をはしごしながら、移りゆく京橋を探索されてみるのも乙なものかもしれません。

梅田編～大阪事務所／絹原　一寛

■日々変わりゆく梅田の風景

梅田周辺の風景が刻一刻と様変わりしています。梅田は関西圏のみならず広域をも見すえたまさしく「大梅田」としてさらにパワーアップし、存在感を増しつつあります。その様子をご紹介しましょう。

JR大阪駅から北に目を向けると、広大な貨物用地が目に入ります。ここは、大阪の最後の一等地と言われる大阪駅北地区。平成18年に開発事業者が決定し、1期（先行開発区域）の準備が進められているところです。平成24年度下期には1期のまちびらきが予定されており、ロボット・IT・ユビキタスといった先端技術を集めた知の拠点（ナレッジ・キャピタル）が形成され、様々な機能が集積することとなっています。

あわせて、隣接する大阪駅ビル（新北ビル）の建設工事と駅舎改良工事、さらにはアクティ大阪の増床工事が進められています。こちらは平成23年春のオープン予定となっています。

JR大阪駅から南、長らく梅田のショッピングの中心であった阪急百貨店も増床・建て替え工事が進められています。建て替え前の百貨店は地上12階建てだったのですが、地上41階建てのオフィス床を持つ高層ビルに生まれ変わります。

少し西の方に目を向けてみましょう。桜橋ではハービス・プラザに隣接して平成16年にハービス・エントがオープンしていますが、そのすぐ近く、サンケイビルの建て替えでブリーゼ・タワーが昨年の10月にオープンしたのも記憶に新しいところです。そして、12月5日には、日本郵政株式会社から大阪中央郵便局と隣接するJR西日本所有地の開発計画が発表されました。ディズニーランドを運営するオリエンタルランドの関西初進出が話題となっており、平成24年の竣工を目指しているとのことです。

一方、東の界隈は相対的に停滞気味ですが、御堂筋のどんつきでお初天神前にその参道も敷地整序型土地区画整理事業で集約したオフィスビルが一昨年の11月に完成、ビル1・2階をくり貫いた参道祝祭空間を公開空地で創出しています。

まさに、梅田周辺は「百花繚乱のお祭り状態」の様相を呈していますが、その背景には梅田の交通ターミナルとしての強みがマーケットとして再評価されていることが挙げられます。関東でも「エキナカ」というコンセプトで駅に直結した商業施設が売り上げを伸ばしていますが、人口減少の局面を迎え、車に依存した郊外型の商業立地では厳しいという事情もあって、都心への回帰を強めているように思われます。そのため、最近では鉄道事業者はむしろ流通業としての顔が目立ってきています。

さらに、最近は西梅田付近の開発が連続したこともあって、梅田の重心が少しずつ西に動いてきているようにも感じます。上記に挙げた施設が全て完成したあかつきには、大きく人の流れも変わっていることでしょう。

■新しくできる風景／消えゆく風景へのまなざし

世界では上海やドバイなど過激な成長・発展を遂げる都市が脚光を浴びています。それらと比べると梅田の開発は見劣りするかもしれませんが、我々の日常の感覚からすればあまりにもスピード感のある変化に、とまどいを覚えられる方も多いのではないでしょうか。

ITなどの出現によって社会・経済の構造は大きく変革しました。それはまた都市の姿にも大きく影響を及ぼしたと思います。かつてないスピード感で都市が造られ、また消えてゆく。その状態に私たちもそれほど違和感を覚えなくなってきました。

古いものは新しいものへと更新され新陳代謝が促される、これは都市として当然必要なことです。しかし、その一方で失われていくものもあります。消えゆく風景というのは、案外覚えていないものだな、と思うのです。

今、日本の都市は分岐点に立っていると感じます。おそらく日本型の解があるように思うのですが、消えゆく風景と新しくできる風景、どちらにもそのヒントがありそうです。

新梅田阪急ビル（仮称）

まちづくりの裁判員制度!?「座・でぃすかす」～草津市の新たな試み～

京都事務所／廣部出・石井努

無作為抽出・有報酬・短期集中型の
新たな市民参画手法「座・でぃすかす」誕生！

昨年12月、草津市で総合計画策定に向けた取り組みの一環として「座・でぃすかす」が催されました。これは、1970年代にドイツで考案された「計画細胞（プランニング・セルズ）（プラーヌンクス・ツェレ）」という市民参画の手法をもとに企画されたもので、「①無作為で抽出された市民」を対象に「②有償による参加」を求め、「③専門家等から情報提供」を受けた上で市民提案を行うというものです。

今回は、市民18名を無作為に選び、日当6,500円で「誰もが安全で安心して過ごせる地域づくり」をテーマに、朝から夕方まで土日の3日間をかけるプログラムに取り組んでいただくこととしました。

さてはて応募者はいるのか？

タフな企画ですので、準備を進める中でこのことが最も大きな懸念でした。が、懸念は喜ばしいかたちで裏切られて参加依頼を送付した2,000人から4.5%・90人もの参加承諾がありました。三鷹市や多摩市などの青年会議所等による先行事例において、取り組みが一定浸透した段階の参加承諾率と遜色ありません。まずは、この段階で草津市民のまちづくりへの意識の高さを知ることができました。

丁寧な情報提供と参加者主体のグループワーク

プログラムは、総論、分野基礎情報、「コミュニティ」「バリアフリー」「見守り」の視点別の情報を順次提供し、合間合間に意見交換の時間を設定。その後に視点別で取り組み提案を行うこととし、6人ずつ3つのテーブルに分かれてグループワークで進めました。情報提供者は行政職員が中心ですが、他にボランティア団体や民生委員児童委員の代表者に地域の実情を語っていただきました。もちろん、食事やお茶うけも、草津産品を含むものを厳選しています。

市担当者とアルパックの3人が各テーブルの補助につきましたが、「進行係」「発表係」「発表手助け係」「まとめ係」「時間管理係」を参加者で担いあいながら進めることで、徐々に参加者主体にシフト。1日目が終わる頃には、ほとんどテーブル任せで取り組んだグループも出てきました。

“珠玉のアイディア”をみんなで確かめる

最終日。3つの視点別に各グループから5項目ずつ出された提案にみんなで投票です。提案された内容は、すべてが参加者同士の「熱い」意見交換の成果です。市民感覚の生活実感に基づいた、バラエティに富んだ提案をそれぞれが入念に吟味し、視点ごとに持ち票を投じました。草津市では、ここで得られた成果を総合計画の内容に反映していくことになります。なお、参考までに3つの視点を通じて最も得票があったのは「コミュニティ」の視点からの提案で、「地域人材の発掘と育成」を図ろうという内容のものでした。

参加者が主体的に進めるグループワークの様子

「座・でぃすかす」を終えて

今回、参加者の共通点は「草津市民」であることだけ。まったく見知らぬ同士が集まって始まった「座・でぃすかす」ですが、最後には「仲間」と認めあえる市民の関係が生まれました。そして、取り組み自体が「集中的なグループワークの研修」として機能していた点が見逃せません。最後には、十分にテーブルマネージを任せられる人もいらっしゃったと思います。草津市としては、単に提案を求めたに留まらず、極めて有効な「投資」を行った格好です。

一方で課題もあります。そもそも計画細胞の手法は、「テーマを絞って提案を求め、市民の選択により何かを決める」ことに用いるのが適当な手法なのですが、総合計画策定をアピールする狙いもあり、今回のテーマの設定は少し大きなものとせざるを得ませんでした。このことが、参加者の「話し合いの時間をもっと」「まちづくり全体を対象としたい」といった感想や、情報提供の範囲が広く準備が非常に膨大となったことなどに結びついていたと思います。個別具体的なテーマを対象とすべきことについて、十分留意していくことが必要でしょう。

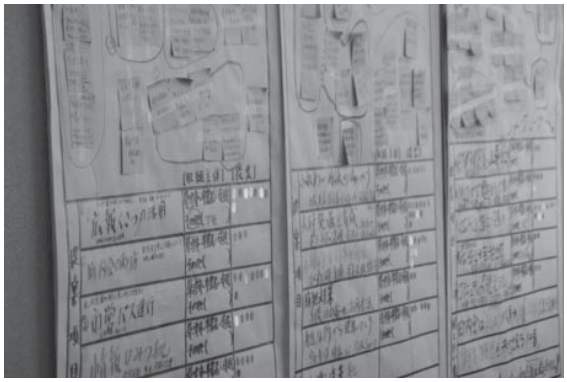
発表の様子

次々と書き込まれる提案

お弁当には、草津名物「うばがもち」も入ってました

「市民 2.0」への道のり

表現は些か古いですが、地方分権がさらに進んでいく時代の「協働のまちづくり」とは、市民が「近隣自治を担う市民」＝「市民 2.0」となっていく過程にあるものと感じています。今回、草津市で取り組まれた「座・でぃすかす」などは、近隣自治の担い手となる市民を少しずつ増やしていくひとつの手段となり得るかと思います。今後さらに様々な市民参画の手法が試みられ、市民の手に自治の知恵がますます行き渡って、仕組みへとつながっていくことを願います。


各グループの提案に投票

韓国のデザイン産業の振興に関する状況

企画政策推進室／堀口　浩司

10月、11月と短期間ながら都市デザインに関するイベントで、ソウルを訪れました。

経済産業省の外郭にあたる韓国デザイン振興院（KIDP, Korea Institute of Design Promotion）が企画し、自治体職員やパブリックデザイン関係のデザイナーなどによる視察団が大阪を訪問した際、２度ばかり案内を致しました。

その際、参加された方との情報交換が面白かったので、一度、我々もソウルを訪問して清渓川（チョンゲチョン）など最近のプロジェクトを見ようという意気込みで、大阪産業大学の金澤先生、HTAデザイン事務所の高原さんと３人で訪問しました。

デザイン産業の振興

韓国政府はデザイン産業を、次世代の産業振興の柱として位置づけ、熱心な取り組みをしています。

我々が最初に訪れたのは、「ソウル・デザイン・オリンピック」という催しでした。1988年のソウルオリンピックから20年を経て、同じ10月に同じスタジアムを会場として、デザイン・オリンピックという見本市が開催されていました。オリンピックスタジアムの外側は、海の漂着物を繋ぎあわせた超大型のタピストリーで飾られていました。

ここで対象となるのはインダストリアルデザイン、グラフィックデザインから建築や環境デザインまで幅広く「デザイン」を取り扱っています。現代（ヒョンデ）やサムソンのような大企業や大手設計事務所、デザイン事務所やCADソフトの会社など中小企業、また大学の芸術分野の学科から建築や都市などの学科まで、幅広い分野の組織がブースを出展しており、商品や業種による縦割りの分野での見本市とは、異なる様相を示しています。企業もあれば専門学校の出展もあり、このオリンピックスタジアムに訪れる方も、サラリーマンから主婦、学生まで幅広い客層となっていました。また、例えば生活デザインなど「デザイン」を学科名に含む大学や教育機関が多いのも驚きでした。

日本では、建築、土木、造園などと職能分野が分かれ、国土交通省なら建設技術、経済産業省なら建築材料など、目的別に細分化されていますが、学校も含めて市民レベルで参加できるところがユニークなところです。

こういった市民レベルで、デザインに対する意識を高め、評価する目を養っていくと、商品や空間のデザインレベルが高くなっていくことでしょう。

韓国は、これまで国策として映画制作の振興に力をいれ、徐々に興行実績をつくり、今では韓流ブームにものって、輸出産業としても観光産業としても効果を上げています。また、国のイメージアップにもつながっています。

海の漂流物を繋ぎあわせたタピストリー

ソウル市役所の出展ブース

我が国でも、アニメやゲーム、J-POPなど「JAPAN・COOL」と称される分野も、注目をされていますが、20世紀の産業政策として自動車や家電などの製造業に比べると、全く評価されていないと思います。自動車などの部品点数が多く、かつては国内では雇用力があった輸出型製造業からソフト産業への転換が進んでいません。

上記の産業群はグローバル化し、人件費の安い新興国を順にホッピングしていく、あるいは、ロボットによる自動化によってコストダウンし商品としての競争力を高めています。しかし、国内産業の振興や雇用力の確保という面では期待は薄く、これからの国内産業は知的で感性を生かした労働集約型産業へと重心を移して行かざるを得ないでしょう。そのような時代の先取りを、隣国の政策から感じました。先の時代の工業化による成功体験から、何を引き継ぎ、どう転換していくのか、大いに考えさせられるところです。

ソウル市のデザイン政策

ソウル市の副市長の一人であるクゥァン氏（写真中央）にお会いしました。名刺の肩書きには、副市長／チーフデザインオフィサー／ソウル大学教授／パブリックデザイン協会理事長とあります。

ソウル市は前市長である李明博の時代からデザイン政策に熱心であり、「SOFT・SEOUL」というテーマで都市デザイン戦略を展開しています。観光政策と併せてパブリックデザインの向上が大きな政策課題となっています。

副市長といっても、任期付きでソウル大学から招かれた方で、ソウル市のイメージ戦略やパブリックデザイン部門の責任者となっています。また、役所のデザイン担当の責任者も同様に民間企業から任期付きで雇用されているということでした。政策に応じて、外部から必要な判断ができる専門家を雇い入れているということです。

その一方で、優秀なデザイナーへの発注方式については、大規模な公共工事の場合には、設計施工一貫でのターンキー方式やPFI方式が一般化しており、デザイナーから設計者、エンジニア、施工まで一貫した企業グループで、事業費とデザインとを総合評価するということのようです。したがって、どのグループと一緒にエントリーするかどうかが重要ですし、コンペのプレゼンテーションも大がかりなもので、拝見したコンペ用のパワーポイントもアニメーション仕立てのお金のかかったものでした。

今回、訪問したキム・ヒョンサム氏（写真左端の女性）のデザイン事務所は、いろいろなコンペで非常に優秀な成果を収めており、「『彼女の参加するコンペは避ける方がいい』と同業者から畏れられている」ということを、審査員をしているソウルの大学の先生から聞きました。写真の清渓川（チョンゲチョン）のデザインについても、最も目抜き通りにある第1工区は彼女のデザインによるもので、随所に大胆なデザイン要素を持ち込んでおり、ちょっと日本の河川管理者には信じられないような設計となっています。

国の産業政策としてのデザイン振興

10月にキム・ヒョンサム氏と出会った縁で、ソウルで11月に開催された「Public Design Exhibition & Seminar」で報告することになりました。主催者はデザイン振興院と国会議員団ということで、会場は国会議事堂に隣接する議員会館、開会式には国会の議長始め関係議員と局長が参加し、結構、大仰なセミナーでした。幾つかあった国会議員の挨拶の一つに、「デザインの振興は、国の政策と

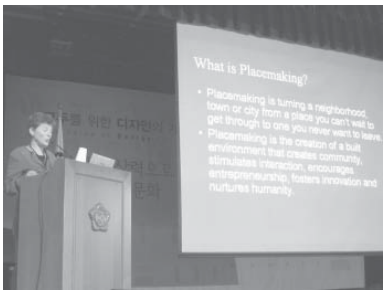
ソウル市役所にて

夜の清渓川（水中のLEDが光っている）

同左（昼間）

韓国国会議事堂

パブリックデザイン展



講演の様子

しても産業の波及分野が広く、雇用力もある」「全体として産業分野の底上げにつながる」と発言されていたのが、印象的でした。

運営の事務局を引き受けていたのはThe Hope Instituteという、まだ若い民間のシンクタンクです。自らを「ソーシャルデザイナー」と称し、自治体などからの委託研究だけでなく、公務員への研修、企業CSRやNPOへの支援など、幅広い活動を目指しています。地方自治体や市民・企業による地域振興や市民起業の支援などを活動目標に掲げ、会議の運営など、幾つか不慣れな部分も見受けられましたが、若さあふれる初々しい組織でした。

このセミナーには、パブリックデザインの産業分野としての振興と併せて、これからは韓国でも市民参加型の手法を取り入れるべく、ニューヨークからPPSの方が参加されていました。パブリックデザインの先進地として、隣国の日本からも市民参加型のプロジェクトを紹介したいという要請があり、高野文彰氏が公園やランドスケープのプロジェクトを、私は関西を中心にウォータフロントや都市開発における市民参加型のプロジェクトをそれぞれ紹介いたしました。

初日は議会関係者の式典と外国人スピーカー達とキムヒョンサム氏による講演、２日目は多様な韓国のデザイナーによる講演という構成でした。講演内容については、PPSのニキティン氏（女性）の話はその２週間前に大阪で聞いたPPSのボスの話とほぼ同様の内容で、「誰がしゃべっても同じ内容で話しをするというはのコンサルタントの企業戦略としてしっかりしている」と感心しました。

高野さんのお話は、北海道の十勝の小さな村に事務所を移転し、人間より牛の方が多いという環境の中で、グローバルな仕事を展開されているというお話で、これも経営者としては「目から鱗が落ちる」思いで聞いていました。キム氏、ニキティン氏、高野さんという３人のデザイナー兼経営者と、事務所の組織運営の考え方や経営環境の違いについて意見交換したのは、それぞれの講演以上に刺激になりました。

韓国におけるパブリックデザインの位置

日本と中国の狭間にあって、２次産業分野の輸出による外貨の獲得が期待しにくい韓国にあっては、映画やデザインなどソフト産業の振興に力を入れています。その中にあって、国民生活や都市環境の向上に直結するパブリックデザインの振興は有力な分野となっています。

一方、パブリックデザインの担い手となるデザイン事務所、設計事務所は、まだ十分な技術的蓄積があるわけでなく、職能の確立と併せて、これから様々な試行錯誤を繰り返して行くことになると思います。

上記のセミナーにおける質疑応答の中では、「今は住宅の設計などを仕事にしているが、どうすれば、公共デザインの受注ができるのか」「どのような基準でデザイン料をきめるのか」「多様なデザイナーの共同作業では、だれが最終的なデザインの決定をするのか」など、極めて実務的な意見交換がなされていました。

公共デザインの分野においては、計画案の検討からデザインの決定、維持管理の担い手からの技術的フィードバック、最終的な設計と施行管理まで、意志決定のプロセスにはそれぞれの土地柄が反映されます。企業の資金投下によって経済的な環境を整え、安全で快適な環境を民間主導で実現するアメリカ型の方法論や、施設管理者の権限が強く公共側の責任も重いため、何重にも設計上の安全策を定めている日本の方法論をそのまま韓国で適用することはないと思います。それぞれの国民性や政治的な背景などを反映し、それぞれの新しいスタイルを追求することになると思います。

スケート客でにぎわうブライアントパーク

民間による活性化の好事例
スポンサーとして銀行の名前がある

次世代たちへ

取締役相談役／三輪　泰司

昨年10月初め、ノーベル物理学賞・化学賞のニュースが、このところ何かと鬱陶しい日本列島を、爽やかに吹き渡りました。

2008年は、関西文化学術研究都市構想の第1次提言30周年でした。11月29日に関西学研都市推進機構の学術委員会主催で、記念公開ワークショップが開かれました。

テーマは次世代研究者育成でした。

昨今、目先の効果ねらいが政策であるかのようになっていますが、国家百年の計と言いますように、次世代のために、とりわけ基礎をしっかりと固めて頂くようにしないといけませんね。アルパックは民ですが、民でも基礎が大事です。専門分化が進むと、基礎的な概念がめいめいに食い違っていて、重大な誤りを犯す惧れがあります。

私にとって関西学研都市構想開始の記念日は、1977年2月5日としています。上高野の奥田東先生宅で、基本理念から推進プログラムまで一気に書き上げた日です。関西学研都市が人類社会になすべきは、研究開発の環境を創ることで、国は基礎研究に力を注ぎ、周りに開発研究、応用研究にシフトする民間企業を集めるとしました。

因みにこの時期は「関西研究学園構想」と称していました。関西学術研究都市という名称は、1978年6月7日、京都府の佐藤尚徳土木建築部長と検討して決定しています。「文化」が付いたのは、1979年10月の奥田・梅棹・岡本・河野会談です。従って「提言」の段階では「学術研究都市」になってます。1978年12月5日、調査懇談会総会で第1次提言を決定。確かに30年経ちました。

昨年の11月24日、奈良忠氏が亡くなりました。30年前のその日、大阪の都市調査会で、奈良さんと二人で第1次提言の起草をしていました。

奥田東先生から言えば次々世代、47歳でした。

篠山チルドレンズミュージアムの館長してます。

大阪事務所／森岡　武

篠山チルドレンズミュージアム

平成20年4月から篠山チルドレンズミュージアムの館長をしております。

篠山チルドレンズミュージアムは、学校統合で閉鎖された中学校を活用し、創造性豊かな人づくりと子どもたちの「生きる力」を育む拠点づくりをめざし、21世紀最初の夏休みにオープンした体験型ミュージアムです。

いろんな意味で凄い施設です

当館は、合併特例債第1号事業（総工費18億円）であることから、未来（子ども）に投資する廃校リニューアルの全国モデル、片や税金無駄遣い施設の象徴といった常に2面性を持った施設として数奇な運命を背負い続けることになります。

このため、日本に3つしかないチルドレンズミュージアムといった本質論とはかけ離れたところで存在意義の議論がなされ、合併の是非論や公共施設の垂れ流し運営の象徴といった報道や政治に便利使いされている施設でもあります。

大衆の常識に悩まされ、納税者の反乱にあう

大衆の常識とは、知らないものは敵、いらないものはいらないという考え方。納税者の反乱とは、緊急のもの以外はいらない、自分に不要なものはいらないといった考え方。これに収益の上がらない公共サービスは切るといった行政の困惑が加わり、文化･芸術･教育を担う公共施設はこれまでにない新たな戦いを挑まなければなりません。

なぜ？館長に

開館以来、年平均7万人の集客力をもつ当館は、昨年度来館50万人を達成しました。

小学生低学年までをメインターゲットにリピート率が高く、年間2000万円強を売り上げています。しかしこれまで、9000万円／年の歳出に対して2000万円／年の売り上げでしたので7000万円／年の歳出超過を続けていました。

平成の大合併第1号の自治体である篠山市では行財政改革に取り組み、その中で公共施設の新しい運営手法を検討するに至り、直営から指定管理者制度に移行しました。篠山再生計画（行財政改革編）には次のように書かれています。「経費のかからない運営方法を検討し、それが見

出せない場合は、平成22年度以降は休館とします。」難しい日本語です。

合併も一番なら、破綻も一番。だったらリノベーションも一番になろうという指定管理者を請けた社長の熱い意気込みに乗せられて館長を引き受けることにしました。

課題は山積みです

引き受けたもののご想像の通り課題は山積です。

従来のコストカット型の指定管理者制度の内容は、9000万円／年の歳出を3200万円／年に抑え、これに収益を加えて運営をしようというものです。この中身は、人件費を含めてそぎ落とせるところは全てそぎ落とした戦略費ゼロの予算です。

何から始めましょうか？

かなり根本的なところからやらないと何も変わらない。長引く不況で予算が厳しくなり、公共サービスを赤字と言わざるを得ない世の中で、公共施設をどのように運営していくのか。既に破綻している市場経済原理を乗り越えたところに解を求めないと先がないなぁというのが就任当初の感想です。

存在意義を示しつつ他とは違う差異的（最適）情報を生み出す館に変えていく。新しいアイデアやデザイン、そして情報をつくりだし、新しい運営費捻出の方策を考え出していける。人まねではなく、独自のアイデアを生み出す人間や組織がこれからの社会を変えていくんだとぼんやり考えていました。私にあるアイデアは発想の転換だけでした。解決策はすごく簡単なところにありました。年間７万人の来館者に、もう一回だけ余分に来館いただければなんとかなりそう。これを来館者倍増と言ってしまうと元の木阿弥です。スタッフには、もう一度余分に来てもらえるサービスの充実を伝えました。

館長の仕事

４月の館長就任以来、たくさんの方々とご縁ができました。交換した名刺の数は1,000枚を超えました。そんな中からいただいた素敵な言葉をつづります。

大人の仕事は、子どもに立派な大人になるための手助けをすること。

親の仕事は、子どもが「ねぇーねぇー」と話しかけてきた時に、全ての手を止めて「なぁーに？」と向かい合うこと。手が離せない時は、手が離せない理由を少しの間だけ手を止めて子どもに伝えること。

館長の仕事は、

①理念を言い続けること。

②職員のモチベーションをあげること。

③予算をとってくること。

まだまだです。

館長の夢

私の夢は、チルドレンズミュージアムなる機能が不要な世の中を目指すことです。かつて、子どもをとりまく環境は全てチルドレンズミュージアムだったのではないでしょうか？大人が生き生きと暮らし、地域や仕事に誇りを持ち、活きた教材が目の前に沢山ありました。そんな大人に囲まれて育った子どもたちは、また生き生きとした大人へと成長していきます。

こういった大人と子どもの関係性は、自然や環境や社会と、互いを思いやり歩み寄るコミュニケーションが成立する世の中を基本としたものだったのではないでしょうか？個人の利益は社会の利益のおすそ分けといった社会ではないでしょうか？

感謝とお願い

篠山チルドレンズミュージアムは今のこの混迷する時代だからこそ必要な施設だと思います。館長就任後、お会いしたみなさんは声をそろえて「若い館長ですね。」と言われます。手前勝手なとり方ですが、古い館長像の払拭と期待感を感じます。

この年齢でこのような機会を与えていただいた方々、共に汗をかいてくれているスタッフ、応援団には心から感謝を申し上げます。しかし、この施設を残さないと、機能させないと意味がありません。生みの苦しみは続きますが、公共施設のリノベーションモデルをもって今年の９月議会を迎えられるようにがんばります。

最後にみなさんにお願いです。篠山チルドレンズミュージアムに来て時間を忘れて遊んでください。

最近食べた「すし」勝手に分類学！

大阪事務所／原田　弘之

「すし」のブランド化による地域おこしの仕事をしているので、最近はスーパーに行くとすしに目がいき、必然的にすしを食べる機会が多くなっています。そんな中から、いくつか紹介し、最近のすしを勝手に分類してみました。

若狭高浜の「焼き鯖ちらし」

福井県高浜町の伝統的なすしです。地元産の焼いた鯖のほぐし身を甘辛く煮て、ちらしずしの中に混ぜ合わせるのが特徴です。錦糸卵や煮しいたけで飾ります。各家庭でおばあちゃんから奥さんへと代々、作り方や味加減が伝わってきた「各家庭オリジナルのすし」です。冠婚葬祭時に、親戚やご近所さんが集まって、大きなすし桶を用意して、みんなでつくり、みんなで分けて、みんなでおしゃべりしながら食べることが習わしのようになっています。いわば「コミュニケーション型、共食型のスタイル」でしょうか。みんなで食べるとより美味しいすしです。

実は、この高浜町のすしブランド化のお手伝いをしており、写真は11月に実験販売を行った時のものです（1.5人分入りで600円。本当はコンセプトを踏まえて家族用4人分などにしたかったのですが…）。

さて、なぜ高浜で「すし」なのかと言えば、高浜から奈良に「すし」を献上していたことを記す最古の木簡が平城京跡から発掘され、高浜町は「すし発祥の地」と公言しているからです。

富士宮の「鱒コットキューブ」

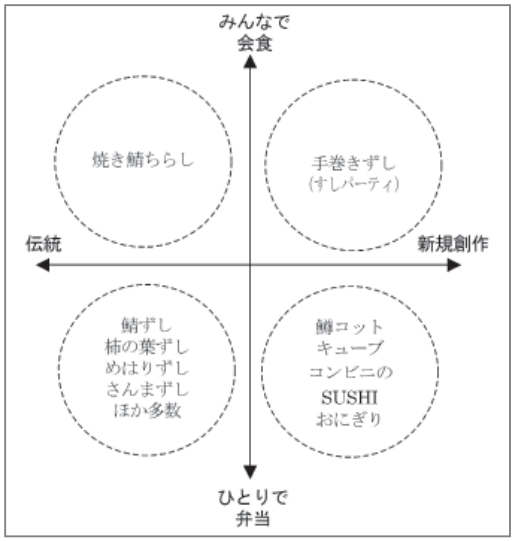
静岡県富士宮市と言えば、B級グルメの「富士宮やきそば」で有名ですが、実は虹鱒の生産量が日本一なのです。それを活用した商品が「鱒コットキューブ」です。ネーミングも箱も、「えっ？それってすし？」という第一印象ですが、箱を開けると、酢漬け鱒とスモーク鱒の2種類が、合計6切れ、まさに一口サイズのキューブ状でかわいく入っています。値段は400円。ターゲットは若い女性でしょうか。味も鱒特有のあっさり味で、食べやすかったです。クリームチーズ入りなのも新しい創作ずしの1つの特徴かもしれません。ちなみに「虹鱒」活用商品として「〇スバーガー」ならぬ「鱒バーガー」も発売中で、これもあっさり美味でした。

富士宮の「鱒コットキューブ」（上：化粧箱のような外箱、下：キューブ状に6つ入り）

いざ「すしの分類学」

ほかに最近食べたすしは、鯖ずし、柿の葉ずし、コンビニのSUSHIおにぎり、手巻きずし、めはりずし、さんまずし、げんなり寿司、へしこ入りうず巻ずしなどなど。さて、次ページの図のようにこれらを勝手に分類してみました。横軸は、伝統－新規創作軸、縦軸は、みんなで会食－ひとりで弁当軸です。需要としては便利さや手軽さを追求し、今後も「ひとりで弁当型」を基本に、伝統的なすしの復活による地域おこしや、新規創作

若狭高浜の「焼き鯖ちらし」



図：「すし」の勝手に分類学
（下半分の需要が高いが、個人的には上半分の隆盛を期待）

すしによる商品開発がメジャーであるとは予想されます。しかし個人的には、図の上半分である「みんなで会食型」の隆盛を期待しています。こんなにせち辛い世の中だからこそ、「みんなでわいわい言いながら食べること（共食型のスタイル）」が、食を見直し、地域を語り、人をつなぐ、新しい食文化を生み出すんじゃないかと思っています。さあ、今年はみんなですしを食べよう！

信楽陶芸トリエンナーレの開催を目指して

京都事務所／大久保　悠子

甲賀市信楽町の概要

滋賀県甲賀市信楽町は三重県・京都府と隣接する県最南部に位置し、山林が約90％を占め、人口1万4千人、21の集落が散在している高原のまちです。信楽焼の歴史は天平17年の聖武天皇の頃に遡り、日本六古窯の一つとして有名です。

信楽焼産地の現状と課題

温かみのある火色の発色と焦げの味が特色の信楽焼は、江戸時代の茶壷、明治時代の火鉢生産により大きな成長を遂げてきました。時代の変遷で人々の生活スタイルが変わる中、植木鉢や食器等、建築用タイル、浴槽などの生活に根ざした製品の幅も拡げてきていますが、中国やベトナムなどからの廉価な輸入商品の攻勢を受け、業界を取巻く環境は厳しい状況が続いています。

産地の課題としては、第一に市場ニーズをつかみ対応するため、窯元、問屋、小売等の組織間の横連携を通じた共存共栄の取組が望まれます。第二に、国内需要はもとより世界に通用する信楽ブランドの存在感を示すデザイン・クオリティを追及する高付加価値のものづくりが必要です。第三に、「信楽ブランド」の高揚のため、訪れる人に親しまれる文化性が溢れるまちづくりが必要です。

県版特区の取組

甲賀市は信楽地域の「国際陶芸産業都市」振興を目指して、県版特区制度の認定を受けており、海外への販路開拓や、陶土資源の確保、人材の育成、環境関連産業の推進等の取組を進めてきました。それらの集大成として平成22年度にはトリエンナーレの開催を目指しています。

基本計画策定委員会で議論を重ね、先進地への視察や講演会の開催も実施し、関係者間での機運が盛り上がってきています。

ここでは、トリエンナーレ開催へ向けて、協力体制を築きつつある様々な団体が日頃取り組んでいる新旧の様々のイベント・行事について、いくつか下記にご紹介します。

窯元を散策するイベント

2008年4月4・5・6日の3日間で「窯元散策路の仲間たち展（主催:信楽窯元散策路のWA）」、「信楽ACT2008～歩くのぞくみつける～（主催：信楽座）」が同時開催されました。代々続く窯元や信楽の地に集うアーティストが立ち上がり、散策路にある窯跡や建物を利用したアート作品の展示や作陶体験、カフェ、演奏等の盛りだくさんの比較的新しいイベントです。当日は各窯元の陶器ビーズを集めてオリジナルアクセサリーを作るラリーなどが老若男女問わず、来訪者の好評を博しました。

また併催事業として開催の「春の信楽 アートな歩き方」では、信楽内の38のお店やギャラリー

が、統一したのぼりやMAPで一体感や回遊性を演出しながら、イベントを盛上げました。

火まつり

信楽には数百年前、江戸時代以前から続くと伝えられる火まつりがあります。

毎年7月の第4土曜日に開催され、信楽焼に携わる人々が火と土と陶祖に感謝し、火に関わる安全を願って行われるものです。

新宮神社から愛宕山山頂の神社まで、小さな子どもから大人まで2.2kmをおよそ1時間かけて松明を奉納します。およそ700本ほどが、力強い太鼓の音と共に、新宮神社から出発して、人の体ほどある松明を担いで歩く姿は、沿道の観衆の気持ちを高揚させます。

愛宕山に参拝にあがる人々が掲げる火と、参拝を終えて山を下る人々が掲げる火の揺らめきを遠くから見守っていると、とても幻想的です。信楽の皆さんが「毎年のことだから」と何気なく話すこのお祭りに、私はとても魅了されました。参道にともる小さな灯り一つ一つに、地域の生業を司る“火”に対する感謝が籠もっている。小さい時から毎年のこうした体験の積み重ねがあるからこそ、信楽焼に対する人々の想いは並々ならないものがあるのでしょう。

たぬき休むでぇー

2008年11月8日には、信楽町観光協会が50周年を迎え記念行事として「ほっとする、たぬきの休日」が行われました。雨の日も風の日も日夜表で来訪者に愛嬌をふりまいているたぬきたちを、1年に1日休ませてあげようというものです。アイマスクをかけてあげたり、鶏鳴の滝へ見物に連れ出したりと、いつもとは違うたぬきの愛らしさをあちらこちらで発見することが出来ました。

8日午前零時に、たぬき製造メーカーの代表、実行委員会メンバー等の関係者が集まり、愛宕山山頂の陶器神社での祈願祭をされたそうです。大胆でユーモアたっぷりのこのイベントは、「たぬきと言えば、信楽」と言われるほど、地域の顔であるたぬきの存在感を改めて示しました。今一度、信楽のまちづくりを問うてみる意味で、地域内へのインパクトも大きかったことでしょう。

信楽ファンとして

紙面の都合で全てのイベント・行事について、ご紹介することが出来ません。ただ信楽ほどブランド力のあるまちでも、脈々と

たぬきの休日：目をつむる大だぬき（信楽駅前）

受け継がれる伝統を重んじつつ、このまちを何とか盛上げたいと既成のアイデアに拘らず行動する人々を他に知りません。地域の伝統や文化を守る住民の、地域や信楽焼に対する誇りや愛情を目の当たりにする度に、私は信楽のまちの魅力に触れた想いで、惹かれずにはいられません。そこに住む人やまちづくりに関わる人々の情熱が、まちのファンづくりに欠かせないと、身をもって感じています。

お詫びと訂正

前号のメディア・ウォッチのタイトルが間違っていました。

正しくは「キョースマ」です。訂正してお詫び申し上げます。

火まつり：松明を掲げて奉行

ビーズラリー：彩り豊かで個性的なデザイン

たぬきの休日：鶏鳴の滝へお出かけ

MEDIA WATCH

紹介者／大阪事務所　森脇宏

「正しく知る地球温暖化 ～誤った地球温暖化論に惑わされないために」

著者／赤祖父俊一
発行／誠文堂新光社

はじめに

最初に本書の結論を述べますと、「現在進行中の地球温暖化の大部分は自然変動によるもので、炭酸ガスの温室効果によるのは僅かである可能性が高い」というものです。何にでも難癖をつける方が書かれた本と間違いそうですが、某紙で天文学者の海部宣男先生が書評を書かれていましたので、読んでみると納得してしまいました。

著者はアラスカ大学の地球物理研究所長や国際北極圏研究センター長を歴任された赤祖父俊一先生で、地球温暖化の問題が一般に認識される以前から、この問題の研究のため北極圏の気候変動研究が必要と考え、研究を進めてこられた研究者です。

温暖化と自然変動

まず、著者の主張を簡単に紹介しましょう。

地球はその誕生以来、気候の大変動、小変動を繰り返してきました。最近の1000年間の気候変動をみても、現在ほど暖かかったとされる中世期の温暖化（約1000年前）、西暦1400年頃から始まった寒冷化、つい最近では1910年頃～1940年に起きた温暖化（現在の温暖化と同程度）、1940年～1975年の寒冷化がありましたが、その原因はわかっていません。1910年頃～1940年に起きた温暖化は、炭酸ガスの放出が急激に増加し始める以前の現象なので、自然変動の可能性が高く、それさえ究明されていないのに、1975年からの温暖化を炭酸ガスによると結論するのは早計だと主張されています。

地球は1800年頃の小氷河期から回復し始めており、現在まで概ね直線的に上昇してきましたが、実際にはその直線的変動に乗ってポジティブとネガティブの変化が交互に現れ、これは準周期的変化と考えられています。そして現在はポジティブの局面にあり、その上昇勾配が大きく、これが「かつてない気温上昇率」の大きな要因のようです。

IPCCの問題点

現在、社会的に広がっている認識はIPCC（国際気候変動パネル）の見解です。2007年の報告では「1900年代の中頃から観測された気温上昇の大部分は人類活動による温室効果ガスによる可能性が極めて高い」と記されています。どうしてこのように著者の見解と大きく異なるのでしょうか。著者は、これに関して幾つかの問題点を指摘されています。

まず、IPCCの気候学者は物理学的考察をするグループが中心で、「物理過程をコンピュータで処理すればいい」という認識ですが、前述の過去1000年程度の気候変動でさえ、その原因もわかっていませんので、コンピュータを用いても限界があります。

また、たくさんの研究者がIPCCの研究に参加されていますが、IPCCの報告の結論は、本当に参加した科学者の一致した意見なのでしょうか。疑問を持ったり、抗議した研究者もいましたが、IPCCの主導グループに無視されているようです。

おわりに

著者は、炭酸ガスを抑制しなくてもいいと主張されている訳ではありません。温暖化の原因を冷静に突き止め、自然変動であれば、それに順応、適応していくことが必要で、炭酸ガス放出を削減、抑制することに膨大な資金をつかっても無駄遣いです。むしろ同じ資金を用いるのなら、環境汚染や乱開発問題もあれば、貧困問題など、もっと世界が取り組むべき課題があると主張されています。

いずれにせよ、IPCCの報告を鵜呑みにすることなく、冷静で科学的な議論が必要で、相互批判の中で、科学的な認識を深めていくべきと思われます。

まちかど

路地歩きって楽しい

大阪事務所／中村　孝子

戦災に遭っていないことが幸いして、京都市内には感じのいい路地（ろーじ）がたくさんある。

花街界隈のお茶屋や置屋がある打ち水をした石畳が続く路地もいいけれど、木造長屋が建っている路地、袋小路になっている路地や手入れの行き届いた植木やひなたぼっこする猫、子どもの遊具、お地蔵さん、ポンプや井戸などがある生活感で満ちあふれている路地も大好きだ。また、町家を利用したしゃれたカフェや小物屋を見つけることもある。まち歩きやサイクリングで目的地までの近道を探している時、こういう路地に出会うと何だかほっこりするのは私だけではないだろう。

少し視点を変えて、最近、私が気になっている街中の路地に話題を変えよう。

その路地は、四条通河原町の裏寺町通近くの路地で、河原町OPAの裏側あたりにある。以前、ここには、焼き鳥屋、お寿司屋さんなどがごちゃごちゃ並びあまりいい印象ではなかった。どちらかというと怖い感じだった。ところが、最近、買い物のついでに通り抜けてみると石畳で整備され、柳が植えられ、「京都柳小路」という粋な路地に様変わりしていた。お店もすっかり変わり、小物屋さんなどのおしゃれなお店が並んでいる。中には路地を背景に写真を撮る観光客もいたりで、なかなかいい感じである。

京都柳小路（写真上）とすっかり変わったその周辺（写真下）

どこでも見られる路地風景

石塀小路の抜け道

路地だけでなく、最近、この周辺には河原町OPA、ベネトン、こじゃれたお店が次々とでき、若者の動線がすっかり変わり、まちに活気がでてきていると思う。個人的には、前のあやしい雰囲気もなかなか好きだったけれども、学生時代に仲間と行った居酒屋やカレー屋さんは、そのまんま健在なんで、内心ほっとしている。

さて、路地は防災や交通面から見たら、色々問題もあるだろう。しかし、観光ガイドブックに載っていない京都のまちの魅力の一つとだと思うので、個人的には残ってほしいと思っている。

京都には、まだまだ、知らない路地も結構あるはず。これからもまち歩きを楽しもうと思う。

アルパック(株)地域計画建築研究所

http://www.arpak.co.jp　E-mail info@arpak.co.jp

本　　社

京都事務所　〒600-8007　京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82　TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764

大阪事務所　〒540-0001　大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F　TEL(06)6942-5732　FAX(06)6941-7478

名古屋事務所 〒460-0003　名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F　TEL(052)202-1411　FAX(052)220-3760

東京事務所　〒160-0001　東京都新宿区片町 1-20 萩原ビル 3F　TEL(03)3226-9133　FAX(03)3226-9560

九州事務所　（株）よかネット　〒810-0802　福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F　TEL(092)283-2121　FAX(092)283-2128